

2019年6月20日

2019年度 第6回Jリーグ理事会後記者 チェアマン定例会見 発言録

〔司会より決議事項、報告事項について説明〕

《決議事項》

1. 実行委員選任の件(富山・讃岐)

カタール富山の森野弘樹氏から山田彰弘氏へ、カマタマーレ讃岐の川村延廣氏から池内秀樹氏に変更となることが承認されました。経歴に関しては各クラブの公式サイトをご覧ください。

【捕捉】

今回の実行委員の変更となった池内氏はJリーグが主催しているスポーツヒューマンキャピタル(SHC)の卒業生です。徐々にJクラブの経営の中核を担う状況ができてきたことを、ご案内いたしました。

〔村井チェアマンのコメント〕

理事会の報告をさせていただきます。決議事項は1点ですが、全体を通して長く議論したのはJリーグの2030年ビジョンについてです。中期の事業計画について議論をしました。2030年ビジョンというのは、2018年ロシアワールドカップ、22年、カタール開催、26年アメリカ・カナダ・メキシコ共催、30年開催地未定となっておりますが、この4年×3クールを12年として、ロシアから考えて12年先をイメージしながら12年後のJリーグを言語化する作業を行っております。ロシアから4年経過し、カタール開催のときには、これが34年ビジョンとなり、4年ごとに後ろにずらしながら、常に12年先を見ながら経営していくJリーグのビジョンの作成がほぼほぼ最終フェーズまで来ています。フットボールに関して、社会連携に関して、ビジネス面に関しては特にto Bのパートナー、スポンサー、放送・放映各社に対するシナリオと観戦者、有料視聴者など、個人のお客様。領域ごとの姿を2030年の言語化をファイナライズしております。これがロングダウンのビジョンだとすると、22年末までの状況を中期計画と称して、そのマイルストーンの最終言語化も本日議論をしております。我々の本業はサッカー、フットボールですので、久保建英選手のような世界に通用する選手をしっかりと育てていこう。そしてアジアの頂点を常に目指せるようにしていこうという思いがあります。クラブワールドカップ(CWC)のフォーマットも検討中と聞いていますが、昨日浦和レッズは敗れてはしまいましたが、アジアのチャンピオンであり続け、CWCで頂点を目指せるように人の育成を通じてな

っていこう。それを支えるためには、ビジネス面、個人のお客様に関心を持っていただけるように、どんな規模感で支えていただくか。この作業をしている関係で、中期の事業計画にまで踏み込んで議論をしています。内容は固まり次第、皆様に還元できればと思います。一言でJリーグはこうだというファイナライズは時間を要しますが、ブランディングの作業と合わせて、タイミングを見て共有できればと考えております。今日はそうした議論の途中フェーズの議論をさせていただきました。

その他、コパ・アメリカや女子 W 杯、アジアチャンピオンリーグと国際試合が続いています。悔しい思いもしていますし、まだまだ力不足を感じる場所もありますが、可能性を感じる局面もあります。

そして、今日、結論を出すフェーズではありませんが、今後のフットボールに関する日程面、特に来年のオリンピックの開催国となるので、スケジュールや日程の協議が始まっております。これもまだ、皆様にお伝えできる状況ではありませんが、その議論と合わせて話をさせていただきました。

〔質疑応答〕

Q: 放送放映に対するシナリオのお話に関して、お話しができないこともあると思いますが、2 年後に VAR を導入する方向にあたり、ネット中継がメインとなると予想されます。テレビの枠を考えたときに、テレビ局から VAR に関する要望なども入ってきているのでしょうか？

A: 村井チェアマン

VAR を導入していくことを視野に入れて、VAR の養成トレーニングを今回の YBC ルヴァンカップのブライムステージ以降で導入します。現在はトレーニング中ですので、最終的にどういう形でスタートするかは、これからになります。正式にステークホルダーなどと細かい話に入っているわけではないので、テレビ局側と具体的な枠などの議論に至っている状況ではございません。